

# まずは「聞く」子どもから

一を聞いて十を知るために

2018. 10. 03

No.32

校長 渡邊 幸二

今朝、職員室の机のメールボックスをのぞくと、いつものように、当たり前のように「マイスターレポート」が入っていました。みなさんお気づきのことと思いますが、昨日まででなんと**100号**を数えました。数もさることながら、その中身の濃さは、先生方も十分ご承知のことと思います。やっと30号の校長室だよりとはレベルが違います。E. K先生のご尽力に大いなる敬意を表すと共に、みなさまで大きな拍手をお送りください。

そして、E先生。これからもご指導よろしく願っています。



## 浜田っ子は「きけない」!?

最近、浜田の子どもたちの話の聞き方の悪さが気になります。授業中の友達の発言はもちろん、先生の話もちゃんと聞いているのか不安です。明らかに聞こうとしていない子どもも少なからずいます。

話を聞いていないというのは、

- ① 話し手にも注目せず、聞く耳を持っていない。
- ② 話し手には注目しているが、聞いていない(聞いている振りをしている)。

という状態でしょう。浜田っ子は、①の状態の子どもがけっこういるように思います。まずは「聞く」という基本からしつけていかなければならないようです(もちろん、そんな状態はとっくに卒業し、より高いレベルの「聞く」にチャレンジしている学級もあります)。

では、「聞く」子どもにするにはどうしたらいいのでしょうか。

私はそんなに難しいことだと思いません。たとえばもっと不親切に、1回しか言わない先生になることなどもそうです。「聞けてる学級」の先生に、そのコツを訊いたら簡単なことです。

「きく・聞く・訊く」の子どもに育てるために、現在あるプランを進行中です。近々ご紹介できましたときには、ご協力をお願いいたします。

